

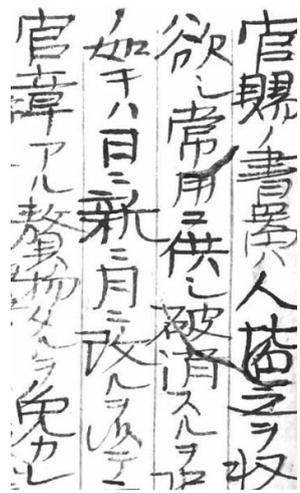
# 東京大学 文書館ニュース

The University of Tokyo Archives Newsletter

vol. 64, Mar. 2020

## 新人職員が独断で選ぶ！資料にみる個性豊かな文字の世界

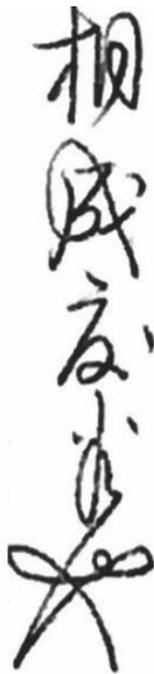
当館所蔵の資料に書かれている文字は、惚れ惚れするような「美文字」から愛嬌のあるものまでさまざまです。今回は「文字」にフォーカスして資料を紹介します。



官立学校生徒賞典規則ノ件 明治7年  
(参照コード S0001/Mo011/0046)



在学証明書下附願関係 大正15年  
(参照コードS0007/20)



無税通関証明書ノ件 (天文台)  
大正15年  
(参照コード S0007/20)



経済学研究科・経済学部教授会決議録  
昭和31年 (参照コード S0280/0033)



中村不能齊学藝志林受領の件  
明治13年 (参照コード S0005/05)

## Contents

- 2 東京大学文書館デジタル・アーカイブ部門着任によせて  
逢坂裕紀子

---

- 4 タイムマシンへようこそ  
千代田裕子

---

- 6 資料の公開について

---

- 7 業務日誌 (抄)  
(2019年8月~2020年1月)

---

- 8 文書館トピックス  
歴史資産としてのキャンパスの価値発見  
~リレー講義に参加して~  
森本 祥子

文書館入口に看板をつけました



本郷本館および柏分館の入口に看板を設置しました。

## 東京大学文書館デジタル・アーカイブ部門着任によせて

東京大学文書館 特任研究員 逢坂裕紀子

近年、さまざまなデジタル・アーカイブの公開がなされ、インターネットを介していつでもどこでも資料や記録にアクセスできる環境が整いつつある。筆者は、これまで大学や研究機関におけるいくつかのデジタル・アーカイブやデータベースの構築に携わってきた。2013年から2019年まで東京大学大学院情報学環と凸版印刷株式会社の共同研究プロジェクトにおいて、明治時代に上野・本郷地域で活動していた数多の工芸家・美術家およびその社会的ネットワークに関する調査研究とデジタル・アーカイブ公開に携わった。また、2017年から2019年まで国立東京文化財研究所の文化財情報資料部の研究補佐員として勤務し、同研究所のデータベース構築やウェブサイト運営にかかる業務にあたった。

本稿では、筆者がこれまで関わってきたデジタル・アーカイブの紹介と、それらの経験を踏まえ東京大学文書館デジタル・アーカイブにおいて今後取り組んでいきたいことについて述べる。

### しのばず文化資源マップ

東京大学本郷キャンパスが位置する本郷から隣接する上野にかけてのエリアは、文化・学術施設が林立する日本屈指の「文教地区」としての顔を持っている。東京大学大学院情報学環と凸版印刷株式会社の共同研究の一環として立ち上げた「しのばず文化情報活用プロジェクト」では、上野・本郷地域に関係する文化資源情報を、個別の機関等に依存せずに広く社会的に活用するための方策やそれを可能にする諸条件の検討を行ってきた。

具体的には、2013年より、国内外のミュージアムなど公的・私的文化施設および個人のコレクションから、浮世絵、版画や写真などの視覚資料、地域史料、地図、論文や一般書等の文献資料を対象に、上野公園にある「不忍池」に関する資料の所在調査をおこない、それらの資料のデジタル公開状況を二次使用の許諾範囲と方法に着目して整理した。

2016年には、それらの調査研究に基づき、自由利用可能な資料画像と許諾手続きを経て利用可能となった資料画像をOpenStreetMapの電子地図をベースとしたデジタルマップ上に表示して、地理空間のなかで資料を閲覧するコンテンツツール「しのばず文化資源マップ」(shinobazu.apllo.io/cesium/)を作成した。リスト化した425点の資料画像のうち、フェアユースが保護期間満了、パブリックドメインとして第三者が自由にデジタル画像を利用することができる環境に置かれていた59点を公開している。2017年には明治時代に上野公園で開催された内国勧業博覧会を対象として、東京府からの出品者情報(作品名・出品者名・住所)約600件<sup>1</sup>をデータベースに格納した<sup>2</sup>。明治初期に開催された内国勧業博覧会の出品者の住所情報を地図上にプロットすることで、第一回(明治10年)から第三回(明治23年)にかけて、出品者の居住地域が浅草方面から徐々に西へ拡大したことや、上野周辺地域への集中が強まった傾向などを確認することができた。

作成したデジタルマップは、この地域に蓄積されてきた文化と空間資源の価値を再認識してもらうツールとして有用で

あり、文化資源から地域の価値を(再)形成することの潜在的な可能性を示すものである。



図1 「しのばず文化資源マップ」トップページ  
(shinobazu.apllo.io/cesium/)

### 明治大正期書画家番付データベース・書画家人名データベース

日本において江戸時代に木版技術が普及すると、情報伝達の媒体としての印刷物が大きな影響力を持つようになった。なかでも摺物と呼ばれる一枚摺りは、ニュースを届ける読売や瓦版、引き札などの広告、そして相撲・芝居番付などに用いられた。こうした相撲や芝居の番付に見立てて、名所旧跡や温泉、金魚や朝顔など、さまざまな事物を対象とした「見立番付」が19世紀初頭の文化・文政期以後に盛んに作られるようになり、明治期には特に多く刊行されたといわれる<sup>3</sup>。これらの番付は作成時の社会的評価や価値判断を反映しており、継時的に辿ることで、特定の分野における評価や分類概念の変遷をみることができる。

東京文化財研究所では、2004年に幕末・明治大正期刊行の61枚におよぶ書画家番付コレクションから、近代造形分野にかかわる人や物の分類、およびその分野における位置づけの変化を探るためのデータベースを作成した。作成にあたっては、番付上に記載された人名と分類のすべてを翻刻し、データベース上でのテキスト検索を可能とした。多くの番付データベースが画像のみの公開にとどまるなか、テキスト検索機能をもったデータベースは先進的であったが、専用アプリケーションを用いて構築されたために利用環境が限定され、また、その後のアプリケーションのバージョンアップにともなう改修がなされなかったため運用を継続することができなかった。

同研究所では、2016年よりこのデータベース再構築に取り組み、2018年にオープンソースソフトウェアを用いたウェブデータベースとして「番付データベース」、そして番付に記載された人名を典拠とする「書画家人名データベース」を公開した<sup>4</sup>。筆者はこの、2018年版のデータベース公開にあたって、書画家番付画像61点および、のべ約41,000名の掲載人名のデータ整理とデータベース構造の検討から構築、HTMLコーディングを担当した。

先述のように、番付をたどることで特定の人物の評価や分類の変遷を追うことができる。しかし、書画家は雅号の変化

や別号の使用などにより同一人物が複数名を持つことも多い。そのため、見出し人名による名寄せを行い、番付単位だけでなく人物単位での情報の整理を行った。整理されたデータはFileMaker上で管理することとした。これにより、番付ごとのデータベースのみならず、番付を典拠とした人名データベースの公開が実現した。



図2 明治大正期書画家番付データベース「東京書画人名一覧」  
(www.tobunken.go.jp/materials/banduke/806981.html)

奥原晴湖			
奥原晴湖	奥原静子		
	図説書画半紙位別 807091	0000 (西暦)	1-8
画	東京書画人名一覧 806981	1876 (明治9)	1-C
	画家一覧 806976	1876 (明治9)	2-C
	皇国名譽書画位表 806971	1879 (明治12)	5-8
開秀	古今名家画一覽 807136	1879 (明治12)	2-C
女史	皇国名譽書画人名録 806906	1880 (明治13)	4-8
書画	東京諸大家畫巻 806966	1880 (明治13)	3-F
南北清濁画	大日本現在名譽諸大家畫巻内 平判開秀 第一編 807101	1880 (明治13)	1-8
開秀畫巻	古今名家改正画一覽 806961	1881 (明治14)	10-8
婦人画	皇国名譽人名畫録 807011	1881 (明治14)	4-F
大日本書画人名鑑	明治十四年四圖一覽 807161	1881 (明治14)	3-C

図3 書画家人名データベース「奥原晴湖」  
(www.tobunken.go.jp/materials/banduke\_name/722161.html)

### 東京大学文書館デジタル・アーカイブ

東京大学文書館では、2018年8月に「東京大学文書館デジタル・アーカイブ」を本公開した。これにより、同館が保有する資料（特定歴史公文書等および東京大学に関連する歴史資料）の目録検索と一部デジタル画像データの閲覧がオンライン上で可能となった。公開にあたっては、予算と資源の制約のなかで継続的なシステム構築をもとめて、オープンソースのソフトウェアであるOmeka S (omeka.org/s/)を採用し、

資料の階層構造を表示するための拡張機能をプラグインとして開発実装し、データをオープンライセンスとして公開している<sup>5</sup>。現在、約35,000件の目録情報と、約96,000カットのデジタル画像を公開している。

現在、筆者が担当しているデジタル化事業のひとつが東京大学文書館所蔵『文部省往復』のデジタル化事業である。『文部省往復』は、1871（明治4）年から1961（昭和36）年に作成された文部省との往復文書の綴りであり、東京大学と文部省との意思決定の過程をみる貴重な史料として重要文化財にも指定されている。明治期の簿冊137冊は、科研費プロジェクト<sup>6</sup>でデジタル化され、同デジタル・アーカイブで画像を閲覧することができる。大正期以降の簿冊は、東京大学デジタルアーカイブズ構築事業の一環としてデジタル化および公開を進めてきた<sup>7</sup>。2019年度は昭和13年の簿冊までをデジタル公開する予定である。また、東京大学百年史編集室時以来のアルバムを集めたコレクションである『史料室アルバム』のデジタル画像の公開を準備中である。

### おわりに

近年、デジタルコンテンツの公開が進み、学術資産や文化資源へのアクセスが容易となるばかりでなく、デジタルデータの活用による表現や知見の提供もますます増えている。その一方で、サービスの終了やシステムの旧式化など、さまざまな問題で公開が停止されるデジタルコンテンツも見受けられる。筆者がこれまで関わってきた事例においても、限られた予算と資源のなかで持続的なシステムを構築するためにオープンソースソフトウェアの活用やオープンライセンスの付与などの取り組みがなされてきた。今後は、これらの経験を踏まえ、東京大学文書館デジタル・アーカイブの内容拡充をいっそう進め、資料のさらなる利活用につなげるとともに、持続可能なデジタル・アーカイブシステムの検討を事例研究や他機関との意見交換、研究会などを通じて続けていきたい。

1 東京国立文化財研究所編、1996、『内閣勅業博覧会美術品出品目録』、東京国立文化財研究所。  
 2 データベース構築に際しては、資料の関連性を紐づけた形での保存を可能にするため、東京大学大学院情報学環の渡邊英徳研究室が開発したデータベースシステム「APLLO」を用いた。  
 3 青木美智男編、2009、『決定版番付集成』、柏書房。  
 4 2018年版データベース公開については、作業担当者である小山田智寛氏による報告を参照した。(https://www.tobunken.go.jp/materials/katudo/807901.html) (2020年1月25日取得)  
 5 宮本隆史、2018、「東京大学文書館デジタル・アーカイブの公開」、『東京大学文書館ニュース』61: 2-4。  
 6 「文部省往復を基幹とした近代日本大学史データベース」（東京大学大学院情報学環教授吉見俊哉代表・課題番号15HP8023）  
 7 https://uta.u-tokyo.ac.jp/uta/s/da/document/6c8f9acc3b4a1a0e8ca33196721fca2d

## タイムマシンへようこそ

東京大学文書館 特任研究員 千代田裕子

航空測量会社から転職して文書館に着任したのは2019（令和元）年9月のこと。長く勤めた民間企業からの転職ということもあり周囲から心配されたが、私にとってアーカイブズに接する仕事に就くことは、ひとつの「夢」であった。今回、ご挨拶の場を借りて、アーカイブズとの出会いから、アーキビストを目指して学んできたことを記してみる。

### 1. はじめに

私の実家は、祖父が立ち上げた、鉛・はんだ等の製造と販売を行う小さな町工場だった。1990年代半ば、祖父にかわり父が会社を継いだ。鉛の環境影響問題が大きく取り上げられるようになると事業環境は厳しさを増していき、業態転換がうまくいかないまま破産をもって事業を終了した。私は家業については関心が薄く、時折「父の代でいずれ会社をたたむのだろう」とぼんやり考える程度であったため、この終わり方は晴天の霹靂だった。

破産申し立てに必要な書類の作成は、高齢の両親に代わり、私が引き受けた。数ある書類のひとつに「事業の開始から支払不能に至った経緯を詳細に記す」というものがあり、私は弁護士とともに両親から聞き取りをしながら、会社の記録と照合してこれをまとめていった。この作業を通して、今まで断片的に聞いていた家業の歴史がようやく私の中で総括された。家族にとっては苦しく不安な時期にあって皮肉なことだが、“ファミリーヒストリー”をたどる作業は、初めて知ることが多く新鮮な経験だった。同時に、もっと早く興味をもっていればこうした状況を（可能性は低いとしても）回避し得たのではないかという後悔と、それでも両親が健在なうちに直接話を聞いたことは幸運だという思いが交錯した。そして、この経験により「歴史は、誰かが意識をしなければ残らないものだ」と実感した。当時はアーカイブズという概念をまったく知らなかったが、思い返せばこれが私にとってのアーカイブズとの初めての接触だった。

### 2. アーカイブズとの出会い

時を同じくして、たまたまつけたテレビのニュース番組でアーカイブズの小さな特集をしていた。特集では、当時問題となっていた公文書管理のあり方に関して、文書管理の専門家である「アーキビスト」の必要性を報じており、学習院大学大学院にアーカイブズ学の研究とアーキビストの養成を目的とした専攻が設置されていることを紹介していた。

当時、勤務先において私は広報部員として社史編纂の作業を進めており、直近10年の「会社のトピックス」を前に、「会社の歴史」として残すべき情報の取捨選択に頭を悩ませていた（社史は10年ごとに編纂されており、

私の担当は直近10年分が中心だった）。資料と関係者の証言を収集し、最大限その実績や思いを伝えたいと考えたが、文字として一冊にまとめることへの限界を感じたため、書籍版の社史と併せて創業当時の幹部社員の座談会、現職役員の座談会、主要プロジェクトの中心メンバーへのインタビューで構成した映像版社史を制作した。なんとか社史としての形は整えたものの、情報の取捨選択の方法については不鮮明なまま終わってしまった。

公私を通じて「歴史を残す」手段について考える機会が多くなったため、アーカイブズを本格的に学ぼうと決意した。上司に「次回の社史編纂をよりよいものとするため」「会社の記録を適切に継承するため」に大学院へ進学し専門知識をつけたい旨を相談すると快諾してくれ、授業出席時の勤務時間は柔軟に対応してもらえることになった。こうして周囲の協力を得ながら、学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ専攻修士課程に進学した。

### 3. 空中写真のアーカイブズ

研究テーマは「空中写真（航空写真）のアーカイブズ」と決めていたが、当初から空中写真に強い思い入れがあったわけではない。通学にあたり勤務時間の融通をしてもらう手前、社業である航空測量に関わりのあるテーマを選んだほうがいだろうと考えた側面もあった。航空測量は、飛行中の航空機から専用カメラを用いて地表面を撮影した空中写真を元に、スケールを合わせて地図を作製する技術で、広範囲を効率よく高精度に測量できるという特長をもつ。民間の航空測量各社は、国や地方自治体等の委託を受けて、主として地図作製を支える測量、森林調査および遺跡調査のため空中写真の撮影を実施する（近年は撮影に人工衛星やドローンも用いられる）。しかし、委託先へ納品した成果品の「その後」については、社内のベテラン社員や顧問に尋ねても明確な回答は得られなかった。目的事業が終了したのち、現状を表示しない古い情報と化し、不要とされる空中写真は廃棄されてしまうのだろうか。その疑問を糸口に研究テーマを定めていった。

会社へのアピールの一方で、過去の国土を記録した空中写真の活用可能性は大きいとも感じていた。その一例が2011（平成23）年に発生した東日本大震災だ。大規模災害が発生した際、政府レベルでの対応を決定するために、被害の概要を早期に把握することが重要だが、たとえば東日本大震災のような大災害の発生直後には被害の全容がわからない場合が多い。だが、被災地上空から撮影した空中写真を用いれば、地理的特性に基づき想定される被害の推定と、それに伴う対策立案の判断、さらには復興計画の立案に役立てることができる。あるいは、

同じ地域を過去に撮影した空中写真と、発災直後に撮影されたものとを比較して、その差分から被害状況の分析を進めるといった手法もある。従来利用分野である地理学・考古学・歴史地理学などに加えて、災害対策・防災分野においても研究資料として活用され、一方でインターネット上による「国土を鳥瞰する楽しみ」が一般化し、研究分野以外での空中写真への興味が高まったこともあり、空中写真の組織的な保存の仕組みに関心をもった。

大学院では、アーカイブズの実地経験による理解を深めるため、アーカイブズ機関における2週間の実習期間が設けられており、私の実習は広島県立文書館（以下、県立文書館という）で受け入れていただいた。県立文書館には、広島県林業課が地域森林計画樹立の基礎資料として撮影・収集し、のちに県立文書館へ移管したフィルム撮影の空中写真（モノクロ、印画紙焼付け）約1万8千点が未整理で所蔵されており、空中写真のアーカイブズを研究テーマにすえた私にとってはこれ以上ない実習環境だった。実習期間中は、この空中写真資料群の初期整理業務を経験し、さらには本資料群の内容調査、構造分析を試みて修士論文としてまとめた。

県立文書館の空中写真資料群は、第二次世界大戦終戦直後から平成初頭までに撮影されたものである。なかでも印象深かったのは、戦後、米軍が撮影した空中写真だった。連合国軍による被占領期には、日本の機関による自国内の飛行および空中写真の撮影が禁止されたため、1947（昭和22）年から1948（昭和23）年にかけては米軍が日本全国の空中写真を撮影し、日本はこの写真を米軍から借り受けて使用していた。このとき貸し出された空中写真の利用目的の大半は、林業経営のためだったといわれている。広島県林業課が米軍写真を入手した経緯や時期は明らかではないが、同資料群の他の写真と比べ、米軍撮影写真には色鉛筆による画面への書き込みが目立ち、粘着テープや広告紙で写真裏面の四隅を補強した跡がみえた。森林管理に用いるのに適した縮尺の空中写真ではなかったが、技術・機材・写真・材料などがまだ十分とはいえなかった当時であって、貴重な資料として長く大切に使い込んでいたものと推察された。ひどく傷んだこれらの写真から、軍需資材としての木材の供出などにより荒廃した森林の立て直しに向き合う、当時の職員の思いが伝わってくるようだった。

空中写真は画面に記録された情報が残れば役割を果たすのだから、デジタル化して閲覧に供すことができれば十分だという意見もあるだろう。しかし、空中写真用の印画紙は製造中止になり、印画紙への手動密着焼き付けや引き伸ばしに用いる機械およびその機械を操る技術者は国内でも数少なくなり、複製技術の継承も危ぶまれている。私たちが写真から受け取ることができるのは、画面に写された情報だけではない。古い空中写真の原板や印画紙に焼き付けられた複製から、写真技術の変遷や空中写真測量産業の歴史を知ることができるのだ。

県立文書館での実習をとおして、すっかり空中写真への思い入れが強くなった上に、予算や人員が限られたアーカイブズの現場で働く職員各位の熱意に感銘をうけたことで、自分自身もアーカイブズに深く関わりたいという思いが募っていった。修士課程を修了したのち、企業におけるアーカイブズ構築の重要性を社内で進言しつづけたが、力及ばず時間だけが過ぎていった。元号が変わり、新しい時代を迎えたこともあって、私はアーカイブズの世界に進むことを決意し、今日に至っている。

#### 4. おわりに

先日、整理した移管文書「経済学部教授会議事録」の第一冊目は1923（大正12）年9月15日から始まっていた。最初のページは、関東大震災発災から半月後に開催された教授会の記録だ。経済学部の校舎が震災被害にあり、それ以前の教授会議事録は焼失したと記されていた。その文書からは、未曾有の大災害に見舞われたなかでも粛々と学部の運営にあたる教職員の姿が浮かび上がる。この文書に限らず、いつの時代の文書にも日常業務に取り組む人々の姿がみえ、私はその変わらぬ営みにある種の心強さを覚えるのだ。

文書館に着任して以来、私は国連難民高等弁務官事務所のアークビスト、モンセラート・ガラヨア氏の次の言葉をかみしめている。「書庫の書類に向き合うとき、私の前の担当者たちが私に語りかけているように感じる。彼らがいかに真剣に、情熱的に仕事に取り組んだかを感じ、その資料を目にすることができる喜びを感じる。アークビストの仕事は書類を並べているだけではない。扱っているアーカイブは歴史を書くのに必要な情報であり、私たちはそれらが作られた時と同じ状態で保管する。アーカイブは、それを見る者を文書が作られた時代に連れていく「タイムマシン」なのだ」<sup>1</sup>

さあ、みなさんも東京大学のタイムマシン、文書館に足を運んでみませんか？

<sup>1</sup> 高橋友佳理「「難民の記憶の糸はここに」 スイス・ジュネーブでUNHCR担当者に聞く」朝日新聞GLOBE+、2017年9月14日 (<https://globe.asahi.com/article/11623724> 2020年1月15日参照)

## 資料の公開について (2019年8月1日～2020年1月31日)

上記期間内に整理を終え、新たに公開した特定歴史公文書等ならびに歴史資料等は、以下のとおりです。

(新規登録資料群＝★)

※概要記述とアイテムリスト(目録)は、当館のデジタル・アーカイブからご確認いただけます(<https://uta.u-tokyo.ac.jp/uta/s/da/page/home>)。

### 特定歴史公文書等

事務	
S0020	公民・成人教育関係
S0058	★ 海外出張調査調査書
S0200	内部監査
S0201	オープンキャンパス
S0203	キャンパス計画室会議
S0266	財務・会計関係規則
S0312	取材・撮影依頼対応
S0338	産学官連携戦略展開事業
S0346	部局別職員組織状況表
S0357	講座及び学科目等の教員定員調
S0378	医学研究所倫理審査
S0419	学術研究懇談会 (RU11)
S0469	★ 学生表彰関係
S0470	★ 教職員研修関係
S0471	★ 職員採用試験
S0481	★ 部局横断型教育プログラム
S0482	★ 入学式
S0483	★ 卒業式
S0484	★ 教職員定員関係
S0485	★ 教育企画室 打ち合わせ資料
S0486	★ 教育企画室 進学振分け制度検討 WG
S0487	★ 障害者雇用関係
S0488	★ グレーター東大塾関係
S0491	★ 「東大の研究室をのぞいてみよう！」プログラム関係
S0492	★ 団体交渉関係資料
S0493	★ 保健・健康推進本部 内規・細則・申し合わせ(制定・改正) 関係
S0494	★ 学生相談連絡会議
S0495	★ 学生相談所関係規則
S0500	★ UTNET(東京大学情報ネットワークシステム)
S0504	★ 留学生担当者連絡会
S0507	★ 東日本大震災に関する部局対応状況調査
S0511	★ 教育企画室 質向上ワーキンググループ
S0512	★ 教育企画室 教育の国際化推進ワーキンググループ
S0515	★ グローバルリーダー育成構想
S0516	★ 国立大学学生関係部長・課長会議
S0517	★ 大学評価体制
S0518	★ IR 懇談会
S0519	★ 環境安全本部年報
S0520	★ 政府調達契約一覧
S0521	★ フューチャーセンター推進機構
S0522	★ 施設実態報告
S0525	★ 職務発明認定書
S0526	★ リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備
大学院・学部	
S0270	教養学部前期課程クラス編成
S0276	総合文化研究科・教養学部予算
S0280	経済学研究科・経済学部 教授会
S0293	理学系研究科・理学部 教育推進委員会
S0294	環境安全研究センター 教員会議
S0299	理学系研究科・理学部 企画室会議
S0300	理学系研究科・理学部 学術運営委員会
S0304	アジア生物資源環境研究センター 教員会議
S0305	生物生産工学研究センター 運営委員会
S0306	農学生命科学研究科・農学部 運営諮問会議
S0317	学際情報学府 教務委員会
S0319	情報学環・学際情報学府 総務委員会

S0409	農学部・農学生命科学研究科 予算関係報告録
S0411	農学部 学部教育会議
S0439	薬学系研究科 授業時間割・授業概要一覧
S0454	経済学部 図書委員会
S0476	★ 理学系研究科・理学部 男女共同参画委員会
S0478	★ 理学部 授業関係
S0479	★ 工学系研究科・工学部 運営会議資料
S0489	★ 研究教育改善室会議
S0490	★ 企画室会議
S0496	★ 工学部化学生命系 運営会議
S0497	★ 日韓遠隔交換講義検討ワーキンググループ
S0498	★ 情報学環・学際情報学府 学務系規則
S0501	★ 情報委員会等関係
S0502	★ 情報学環・学際情報学府 入試問題
S0503	★ 総合文化研究科図書委員会・駒場図書館運営委員会 議事録
S0505	★ 三鷹国際学生宿舎院生会
S0508	★ 農学生命科学研究科 技術職員業務運営・組織検討委員会
S0509	★ 演習林運営委員会
S0510	★ 危機管理連絡会
S0523	★ 理学系研究科・理学部 各種委員会名簿
S0524	★ 理学系研究科・理学部 規則改正
附置研究所	
S0418	社会科学研究所 社会調査・データアーカイブ研究センター運営委員会
S0475	★ 先端科学技術研究センター 教授総会議事録
S0477	★ 生産技術研究所 技術部連絡会
S0480	★ 生産技術研究所 次世代育成オフィス
S0499	★ 生産技術研究所 社会人新能力構築支援(NExT)プログラム
S0506	★ 社会科学研究所 東日本大震災対応
附属図書館	
S0078	東京大学図書行政商議会議資料
全学センター	
S0513	★ アイソトープ総合センター協議会議事録
S0514	★ 科学技術庁立入検査
機構等	
S0062	東京帝国大学五十年史編纂関係資料

### 歴史資料等

教員資料	
F0029	佐藤銀五郎関係資料
F0164	佐藤愼一関係資料
F0188	★ 教育学部長室資料
F0189	★ 岡津守彦教育学部長関係資料
F0246	★ ジェームズ・メイン・ディクソン勲記
学生資料	
F0173	飯島正之助関係資料
F0217	田口文太関係資料
職員資料	
F0190	★ 全学会議配布資料(広報室長保存分)
関連団体資料	
F0245	★ 東京大学スキー山岳部関係資料
その他	
F0250	★ 理学部植物学教室関係資料
F0254	★ 史料編纂所旧蔵資料
F0255	★ 大内兵衛処分問題・河合榮治郎事件関係資料

上記期間中も個人や団体から多数の資料を寄贈いただきました。ありがとうございます。今後も引き続き、東京大学に関係する資料・学内刊物のご寄贈をお待ちしています。

# 業務日誌(抄)

## (2019年8月～2020年1月)

※(本): 於本郷本館、(柏): 於柏分館

8月5日	森本、秋山、総務課とファイル管理簿打ち合わせ 森本、八王子市公文書の管理に関する条例制定に向けた有識者検討委員会出席 659、661、663号室、室外機不調(柏)	10月21日	秋山、国際公文書館会議(ICA)年次総会参加(アデレード)(～10/24)
8月7日	学習院大学大学院アーカイブズ学専攻アーカイブズ実習生2名事前来訪(本) 森本、工学部列品館より紛争カセット引き取り(本)	10月24日	森本、百五十年史編纂室会議陪席(本)
8月16日	659、661、663号室空調修理完了(柏)	10月25日	森本、ビジネス・アーキビスト養成講座出講 宮本、東洋文化研究所研究会出席 柏一般公開(「知の蔵、文書館」/BUNSHOKANです！(1968-69年東京大学紛争記録))(～10/26)
8月19日	学習院大学大学院アーカイブズ学専攻アーカイブズ実習生2名受入(～8/30) 書架清掃(柏)(～20日) 環境整備チームによる書架清掃(～8/20)(柏)	10月29日	第60回館員打ち合わせ(柏)
8月21日	秋山、平野浩之副理事・財務部長インタビュー参加(本) 秋山、百五十年史編纂室柏谷誠委員、石坂さくら特任研究員、本郷書庫視察 森本、文書管理システム業者打合せ(総務課、情報公開室)	10月30日	環境整備チームによる書架清掃(～10/31)(柏)
8月22日	取蔵庫清掃・殺虫剤エヤローチ散布(本) 書庫入り口全てにエヤローチ散布(柏)	10月31日	森本、千代田、理学部貴重資料見学 6月開始の除湿機排水作業終了(柏)
8月23日	森本、政策研究大学院大学3名、大学資料室の設置予定のため相談および見学対応	11月1日	東京大学赤門合気道倶楽部関係資料(F0252)、追加寄贈1点 S110空調OFF(湿度50%下回る)
8月26日	山本義隆氏より山本義隆関係資料(F0107)、刊行物等追加寄贈2点 森本、国立公文書館アーカイブズ研修I出講 広報センターより閲覧終了刊行物5箱移管	11月5日	教員ミーティング(本) 秋山、蓮實重彦元総長へインタビュー(第3回)(駒場)SC105、S110清掃・エヤローチ散布(本)
8月28日	第58回館員打ち合わせ(本)	11月6日	609号室取蔵庫空調OFF(柏) 坪井九馬蔵関係資料他本郷→柏へ移動
9月1日	千代田裕子特任研究員着任	11月7日	全取蔵庫空調停止(柏)
9月2日	F0251平野浩之関係資料寄贈(1点) 秋山、平野浩之副理事・財務部長インタビュー参加(本)	11月8日	森本、星野、史料編纂所研究会参加
9月8日	医学部1号館8:00-12:00 停電	11月13日	健康と医学の博物館展示替え(第2回-2)
9月9日	都内台風15号上陸(本郷被害なし、柏671号室のみ窓より吹き込みあり) 取蔵庫清掃・殺虫剤エヤローチ散布(本) S110・SC105空調ON(除湿、25度、送風弱)	11月15日	森本、国立公文書館アーカイブズ研修III出講 森本、国立近現代建築資料館情報小委員会出席 法務課文書移管
9月11日	秋山、宮本、森本、逢坂、百五十年史編纂室会議事前打ち合わせ(工) 教員ミーティング(本) 東京大学赤門合気道部関係刊行物等寄贈資料3点 669号室ダニアース散布(柏) 全室扉下に隙間ブラシ設置(柏)	11月18日	森本、東京都公文書管理委員会出席
9月12日	森本、全史料協関東支部出席	11月22日	森本、千代田、総別館LPトークセッション8「学術におけるデジタルアーカイブの可能性-工学史の事例から-」参加
9月17日	秋山、蓮實重彦元総長へインタビュー(第1回)(駒場) 宮本、デジタルアーカイブ学会誌編集委員会出席(本)	11月25日	森本、千代田、工学史料見学
9月19日	森本、宮本、附属図書館と帝国大学五十年史史料公開基準について打ち合わせ(本)	11月26日	森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席(本) 森本、秋山、里見理事へ2018(平成30)年度里見朋香理事基金による文書館活動報告 森本、三菱総研ヒアリング出席(国立公文書館) 小根山、国際公文書館会議東アジア地域支部(EASTICA)セミナー参加(都内)
9月24日	第59回館員打ち合わせ(本) 中嶋副館長、文書館視察(本)	11月28日	秋山、蓮實重彦元総長へインタビュー(第4回)(駒場)
9月25日	駒場寮同窓会より駒場寮関係資料(F0160)追加寄贈5箱 秋山、近現代建築資料館2名訪問調査・視察対応(柏)	11月29日	第61回館員打ち合わせ(本) 宮本、第3回東京大学学術資産アーカイブ化推進室主催セミナー登壇(館員は参加)
9月26日	森本、三菱総研と打ち合せ(本) 森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席(本) 宮本、アデレード大学院生書庫見学対応(本)	11月30日	森本、「精神科カルテに関する研究会」にて報告、秋山陪席(九州大学大学文書館)
10月2日	健康と医学の博物館展示替え(第2回-1) 森本、秋山、アリゾナ州立大学図書館司書訪問調査・視察対応(本) SC105、S110清掃・エヤローチ散布(本) SC105、S110の扉隙間ブラシ交換(本)	12月2日	産業医巡視(本)
10月3日	宮本、情報基盤センターと打合せ(本)	12月10日	佐藤館長、森本、宮本、逢坂、台湾大学図書館長他5名の見学対応(本郷) 取蔵庫清掃・殺虫剤エヤローチ散布(本)
10月4日	秋山、蓮實重彦元総長へインタビュー(第2回)(駒場)	12月11日	健康と医学の博物館展示替え(第2回-3)
10月7日	663号室棚はめ込み式保存箱の組立&収納開始(柏)(～10/17)	12月16日	森本、国立公文書館と打ち合わせ(本) 環境整備チームによる書架清掃(～12/17)(柏)
10月10日	森本、国立公文書館アーカイブズ研修III出講	12月17日	秋山、蓮實重彦元総長へインタビュー(第5回)(駒場)
10月12日	台風19号関東直撃(本郷・柏ともに被害なし)	12月18日	森本、文化資源学講義出講および千代田、星野聴講(本)
10月19日	第18回ホームカミングデイ(文書館展示「東京大学とスポーツ」)	12月19日	森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席(本)
		12月24日	第62回館員打ち合わせ(本)
		1月15日	健康と医学の博物館展示替え(第2回-4) 秋山、国立公文書館研修II参加(～1/17) 取蔵庫清掃・殺虫剤エヤローチ散布(本)
		1月17日	逢坂、シンポジウム「デジタル知識基盤におけるパブリックドメイン資料の利用条件をめぐって」参加
		1月21日	千代田、内閣府「公文書管理に関する独立行政法人等連絡会議」参加
		1月23日	森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席(本)
		1月28日	第63回館員打ち合わせ(柏)

# 文 書 館 ト ピ ッ ク ス

## 歴史資産としてのキャンパスの価値発見 ～リレー講義に参加して～

2019年度、文書館は、人文社会系研究科文化資源学専攻の「東京大学の歴史資産：埋蔵文化財と文化資源」の講義の1回分を担当する機会を得た。これは、埋蔵文化財、建築史、文化資源学、博物館、文書館といったさまざまな立場の教員によるリレー講義で、それぞれの視点から大学のキャンパスを見ることで、その歴史資産としての価値を多面的に浮かび上がらせるものだった。私はそのなかで、「文書に刻まれた東京大学の歴史」というテーマで講義をした。

講義にあたっては、文書館（アーカイブズ）とは何をするところか、という基本を理解してもらうとともに、キャンパスで目にするもの（建物、銅像、など）のもつストーリーが文書からわかるということを伝えることに焦点を当てた。

例えば、工学部1号館前にあるジョサイア・コンドル像。先行する回で催行されたキャンパスツアーで、すでに学生達は像を見ながら解説を受けている。そこで私は、その像が大学に寄附された際の手続きや戦時下に金属回収の危機が押し寄せたときの様子を、文書館所蔵の法人文書を使って紹介し、目に見えるコンドル像のもつ目に見えない歴史が文書から浮かび上がることを伝えた。

また、明治10年の東京大学設立の達を含む簿冊「文部省往復」（国指定重要文化財）や、昭和6年の航空研究所行幸に関する多様な媒体の資料の実物を手に取って見てもらい、現物資料のもつ感触や資料どうしのつながりを体感してもらった。



写真2（講義風景）

大学文書館は、設置母体である大学の活動の役に立つことが第一義である。それは大学の運営や広報への支援であると同時に、大学の教育研究に資することでもある。今回の講義の機会を得て、ささやかながら教育に資するきっかけができた。今後、学生の認知が広まり、学生の利用が増えていってくれることを楽しみにしている。

ところで、自分の講義の準備ということもあって、他の講義もほぼすべて聴講した。どの講義も目を見開かされる情報にあふれていて、講義を受けた後はキャンパス内を歩いて「歴史資産」を見るのが楽しくて仕方がない。このキャンパスに通うすべての人に知ってもらいたい、と強く思いつつ、そうした活動によりいっそう文書館も参加していきたいと感じた。

（森本 祥子）



写真1（銅像ほか）

東京大学文書館ニュース 第64号

ISSN 0915-3284

発行日：2020年3月31日（年2回発行）

編集・発行：東京大学文書館

〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1

電話：03（5841）2077（直）

<https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/index.html>

印刷所：松枝印刷株式会社